

『蜘蛛の糸』に見られる構成の破綻

——乱雑に並べられた矛盾要素——

小 林 信 彦*

話の要旨

ある日のこと、お釈迦様は極楽の蓮池の縁を散歩していました。ふと池の中を覗くと底に地獄が見え、そこで苦しんでいるカンダタが目にとまりました。この男は前世で放火と殺人を繰り返した大盗賊でありましたが、一度だけ地面を這うクモを踏み潰さなかったことがあります。このことを思い出したお釈迦様は、カンダタを地獄から救い出してやろうと思いました。側を見ますと、蓮の葉の上にクモが一匹いました。お釈迦様はその蜘蛛の糸を取って、地獄の底へまっすぐそれを降ろしました。

カンダタは上から降りて来たクモの糸を見て、それに取り付いて登って行きました。かなり登って目を下に向けますと、罪人どもが数多く後に続いていました。これを見たカンダタは「このクモの糸は俺のだ。離れろ」と叫びました。とたんにクモの糸は切れ、カンダタは真逆さまに地獄へ落ちて行きました。自分のことしか考えない無慈悲な心がそれ相当の罰を受けたのです。お釈迦様は悲しそうな顔をして、再びぶらぶら歩き始めました。

A

役割あるいは性格が途中で一変するお釈迦様

極楽をぶらぶらしていたお釈迦様は、ふと池の底に地獄を見ました。そして、カンダタがそこにいるのが目に止まったのです。お釈迦様が地獄を覗いたのは偶然ですし、そこにカンダタを見かけたのも偶然です。最初から目を付けていたわけではないのです。

やがて御釈迦様はその池のふちに御佇みになって、水の面を覆つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。……

するとその地獄の底に、犍陀多と云う男が一人、外の罪人と一しょに蠢いてゐる姿が、御眼に止りました。……

このカンダタをお釈迦様は地獄から救出しようとしします。そして、それを実行しようと取

*本学文学部

り掛かります。ここに描かれているお釈迦様は、気まぐれに選んだ男の前世の報いを気まぐれに中断しようとしているのです。お釈迦様は自分の意志で地獄にいる「罪人」の一人を救出しようとしています。そして、そうする能力と権限がお釈迦様にあることを前提にして、作者は状況を報告しているのです。

さうしてそれだけの善いことをした報には、出来るなら、この男を地獄から救い出してやらうと〔御釋迦様は〕御考へになりました。……御釋迦様はその蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになつて、玉のやうな白蓮の間から、遥か下にある地獄の底へ、まづぐにそれを御下しなさいました。

ところが、お釈迦様の目論みに反して、救出される前にカンダタは再び地獄へ落ちる羽目になりました。何をすることもできないのか、あるいは何をしようもしないのか、このことについて、お釈迦様はの反応ははなはだ消極的です。「悲しさうな御顔」をして遺憾の気持ちを表すものの、ただ傍観しているだけです。何か思案することはありませんし、何かの行動を取ろうと心に決めることもないのです。

御釋迦様は極樂の蓮池のふちに立つて、この一部始終をちつと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうな御顔をなさりながら、又ぶらぶら御歩きになり始めました。

地獄を覗いた場面では、お釈迦様が地獄にいる者を助け出そうとします。頼まれもしないのに助け出そうと思いついたわけですから、好きでやっているのです（お釈迦様A）。それなのに別の場面では、カンダタが再び地獄へ落ちてても、手を出そうともしません（お釈迦様B）。このように、この作品では異質な二人のお釈迦様が登場しているのです。これでは、読者は大いに戸惑います。

もしカンダタが再び地獄に落ちることにお釈迦様が関与していないなら、地獄にいる者の運命を変える権限がないなら、少し前まであれほど好き勝手に地獄にいる者を救い出していたのに、ここへ来て唐突に権限を失ったことになります（権限がある人の役割 → 権限がない人の役割）。芥川の『蜘蛛の糸』では、お釈迦様の果たすべき役割に一貫性がないことになります。

そして、もしカンダタが再び地獄に落ちることにお釈迦様が関与しているなら、地獄にいる者の運命を好き勝手に変える権限があるなら、少し前まであれほど熱心に救い出そうとしていたのに、ここへ来て急に性格が変わったことになります。その気になれば地獄へ落とすのを止めることもできるとすれば、あれほど救出に熱心であった前の場面と違って、今度は救済に熱中することがない冷静な観察者に一変したことになります。そうしますと、同じ人物の人柄に一貫性が欠如していることになります（特定の人間の救済に熱心な人柄 → 冷静な人柄）。

もしお釈迦様が関与していないとすれば、
力があって頼りになる → [やる気があっても]力がなく頼りにならない

もしお釈迦様が関与しているとすれば、

やる気があって優しい → [力があるのに]やる気がなく冷たい

芥川の意図しているのがどちらであるにしても、役割が変わるか人柄が変わるかの違いはありまして、同一作品の中で主要登場人物が場面によって異なり、まるで別人のようです。その結果、物語展開に一貫性が保たれていません。相容れない二つの要素が無造作に並べられて、話の構成に重大な破綻が生じているのです。

B¹

カンダタの地獄再落下に関与しないお釈迦様

この出来事の始めから終わりまで、お釈迦様は身動きせず観察を続けていました。そして、カンダタの落下にお釈迦様の意志が働いていたとはどこにも明記されていません。それに、クモの糸が切れたのはカンダタが喚いた瞬間でありまして、お釈迦様が介入する機会はなかったようです。

お釈迦様の関与を積極的に裏付ける言葉はありませんし、関与できなかったことを悔やむ気配もありません。カンダタが地獄の底に落ちたのを見届けた後は、悲しげな顔をして散歩を再開したに過ぎません。その間の成り行きの実況を報告する語り手の芥川によれば、こうなったのはカンダタの「無慈悲」な心が「罰」を受けたからです。そして、お釈迦様の心情を推測して、語り手は「浅ましく思召されたのでございませう」と言います。

クモの糸が切れた時にじっと見ていただけですから、カンダタの落下にお釈迦様は関与していなかったことになります。そうしますと、カンダタを地獄から救出しようと試みる場面(A)とカンダタが再び地獄へ落ちる場面(B)では、お釈迦様の役割が全く違うことになります。

A場面のお釈迦様は自分の意志で救出を決意します。この場面でお釈迦様は事態を完全に掌握しています。そして、極悪非道の者にすっかり同情しています。ところが、B場面のお釈迦様は当事者ではなく、事態の進展に全く関与していません。ここでお釈迦様は観察者に過ぎませんし、そのことを遺憾に思ってもいません。A場面に見られる同情心は、B場面にその片鱗さえ窺えないのです。

A場面のお釈迦様は、何か口実さえ見つければ、それがどんなに小さい口実であろうとも、どんな悪党でも救い出してやろうとしています。そしてお釈迦様にはそうする能力と権限があります。この場面に登場するお釈迦様は、極悪非道の者も含めてどんな人でも救おうとします。そして、それができる立場にあります。何しろ放火と殺人に専念した男を地獄から極楽へ移そうというのですから、できないことは何もありません。

カンダタが再び地獄へ落ちるB場面では、この究極の救済者としての姿が完全に消えています。お釈迦様の知らないうちにカンダタは再び地獄に落とされます。この場面に登場するお釈迦様は、人間の死後の運命について何の決定権もない局外者に過ぎません。そして、自

分の与り知らぬところでなされた決定に納得しています。それに、あれだけ熱心に始めた救出活動が挫折しても、このお釈迦様はただ「悲しそうな顔」をするだけです。

カンダタの救出が開始されるA場面で、芥川のお釈迦様は人間の境遇を意のままに操っています。カンダタが苦しみを受け続けか苦しみから解放されるかは、お釈迦様の腹一つで決まります。ところが、カンダタが再び地獄へ落ちるB場面になると、芥川のお釈迦様はカンダタの置かれた立場に干渉しません。カンダタが苦しみから解放されるか苦しみを再び受け続けるかは、お釈迦様の意志と無関係に決まるのです。

そうしますと、この場面でカンダタの身に起こった境遇の逆転は、お釈迦様のしたことではなかったとしますと、誰がしたことなのでしょう。誰がしたことでもないのだとしたら、悪いことをすると「罰」が必ずもたらされるメカニズムがあって、それが自動的に作動したのでしょうか。

自分が始めた救助活動が破綻したのにじっと見ているだけのお釈迦様など、日本の文化伝統にはありませんので、そういう問題への答えは日本文化の中に用意されていません。自分で発明したにせよ、どこかから借りてきたにせよ、この場面で芥川は全く異質なお釈迦様を持ち込んでいるのです。そしてこのようなお釈迦様に接して、日本人の読者は戸惑うしかないのです。

問題は作者の芥川がこのことを全く気にしていないことです。この異質なお釈迦様を持ち込んだことについて何の言い訳もしていません。日本の伝統に添ったお釈迦様との間に齟齬があることを芥川は気づいていないのです。肝心の点で状況を把握しないまま、話を組み立てようとしたのですから、整合性のある筋書きができ上がるはずがありません。自分で展開しようとするストーリーを作者がコントロールできないのです。

いずれにしても、カンダタの救出が企画されるA場面と再び地獄へ落ちるB場面では、前提となるお釈迦様観がまるで違います。そして、このことに芥川自身が気づいていません。まして、何とか辻褄を合わせようとあがくことなどありません。だからこそ、一人のお釈迦様に違った役割を割り付けても平気でいられるのです。

一編の童話を作って世に問おうとした芥川は、自分でもわけが分からないまま、矛盾する要素を秩序なく並べているに過ぎません。その結果、同一作品の中で主要登場人物が相反する二つの役割を演じることになり、物語の展開に一貫性を欠く結果となりました。

B²

お釈迦様がカンダタを再び地獄へ落としたと思う読者

カンダタが地獄へ落ちた時に、お釈迦様はじっと見ているだけです。すべてが終わった後も冷静さを保ち、悲しそうな顔をしてはいるものの、動揺することなく再びぶらぶら歩きは始めます。カンダタが地獄に落下した際の様子を描写するに当たって、お釈迦様がこの処罰に関与していないことを前提として、語り手は状況説明をしています。

しかしながら、『蜘蛛の糸』を批評する際に「お釈迦様の無慈悲」に言及する読者がいることもまた無視できません。救出場面の描写でお釈迦様の熱心さについて語られたばかりでもあり、仏様を無制限の救済者とする文化伝統を受け継いでいますので、苦しんでいる人を救済することについて、お釈迦様にやる気があることを多くの読者は信じているのです。

そして、「カンダタの処遇について、すべての決定を下す権限がお釈迦様にある」と信じる読者がいるのです。これが読み間違いであるとしても、そういう誤読の可能性を作者は考慮すべきでした。しかしながら、芥川にはこの点でも読者への配慮が欠けています。「じっと見ているだけ」と言ったところで、読者の思い込みが消えるわけではありません。

ここでお釈迦様がカンダタの地獄落ちに関与しているなら、それまでは好き勝手に地獄から救い出すことができる超大実力者であったのですから、ここへ来て自分の意志で救出作業を取り止めたことになり、進んで地獄へ落としたことになります。苦しむ者を助けるのが大好きな性格が急変して、今度は逆に極刑を科すことになるとすれば、お釈迦様はいつも優しいと信じている日本人読者の反感を買うのは当然です。

「お釈迦様が自分の意志でカンダタを罰した」という理解は、作者の与り知らぬ所で起きた読み間違いの結果かも知れません。しかしながら、「お釈迦様の関与がなかった」と読みたいのなら、その旨ははっきりと説明しなければなりません。説明がなければ、お釈迦様がカンダタの地獄再落下に関与していると理解されてもしかたがないのです。

この場面でお釈迦様がカンダタの地獄落ちに関与していないのなら、それまではさんざん関与していたのですから、全能の救済者であったお釈迦様の役割がこの場面で急変して無力な存在になったことになります。ところが読者は「お釈迦様が無力な存在である」とは夢にも思っていないのです。読者の知らないうちに役割を逆転しておいて、そのように理解させるのは無理というものです。役割が逆になったことを読者に知って貰いたければ、その理由を説明して読者を納得させる必要があります。ところが『蜘蛛の糸』では、この点について何の説明もありません。

それどころか、「カンダタの地獄落下にお釈迦様の関与がなかった」とはっきり言われることさえないので。まして、関与者としてお釈迦様以外の誰かが特定されることなどありません。この点については芥川自身も考えていないからです。このように肝心の点で情報を与えられていない中で、直前まですべてを取り仕切っていたのは誰かと考えれば、お釈迦様が地獄へ落としたと思込むのは当然です。

日本人にとりまして、お釈迦様は慈悲の人でありますから、進んで人助けをするのが当然です。それが唐突に人助けに積極的でなくなり、あろうことか処罰者になるとすれば、日本人なら大いに戸惑うのは当然です。『蜘蛛の糸』を学生に読ませますと、異口同音に語るのにはB場面を読んで覚える戸惑いと不快観です。処罰するお釈迦様など聞いたことがないので、日本人の多くにとりまして、これは当然の自然な反応と言えましょう。お釈迦様が処罰したと思って、裏切られたような気になるのです。

C

日本の伝統に忠実な記述の後に置かれる反伝統的な記述

日本の文化伝統でお釈迦様は厳しく罰する存在ではありません。極悪非道の悪党をも救おうとするお釈迦様Aは、日本文化の中で形成された人物像を反映するものでありましょう。ところが、再び地獄に落ちたカンダタを救えないお釈迦様Bは、日本人の念頭にあるお釈迦様と相容れません。

お釈迦様に限らず、日本の仏様は「願ふところをよく與へたまふ」と言われ、無制限の救済を期待されているのです。芥川自身にしても、カンダタ救出を始めるに先立って「それだけの善いことをした報には、出来るなら、この男を地獄から救ひ出してやろう」と考えます。この文を読めば、「お釈迦様には人間の行いを評価する力があって、報いを授ける権限がある」という理解が生じることでしょう。

この場面に登場するお釈迦様の威勢の良さを考えれば、「出来るなら、救い出してやろう」の「出来るなら」という言葉は、自分の能力の限界を設けるものではありません。「ひょっとしたら、俺の力では無理かも知れない」と思って、予防線を張っているのではないのです。救出作業が失敗するとすれば、誰か別の者のせいです。後の場面で救出計画が失敗に終わったのは、カンダタが「無慈悲」であったからでありまして、お釈迦さまの落ち度ではありません。お釈迦様の下ろした蜘蛛の糸に縋ってわき目も振らず登って行きさえすれば、カンダタは最後に極楽にたどり着くのです。

「出来るなら」という言葉は、「状況が許せば」/「思わぬ不都合がなければ」ということで、「自分の能力の範囲内で可能なら」ということではありません。「思わぬ不都合」とはカンダタが途中でふと下を見たことです。それさえなければ、お釈迦様の救出作業は必ず成功したはずです。究極の悪党に究極の慈悲が欠けていたことを前以て予想できなかったわけですから、このお釈迦様は人間性を観察する能力が乏しく、「放火殺人の一生を送った男が他人を思い遣って当然」と思っていたのです。それに、このように無茶な条件を付けて人助けをするお釈迦様は日本の伝統文化と矛盾します。

さらに、小動物を殺さなかったというだけで、「放火殺人を死ぬまで繰り返した大悪党が受けるべき罰を中断してもよい」とお釈迦様は考えます。その際に「カンダタはそれだけの善いことをした」と言いますが、実際には何か善いことを一つでもしたわけではなく、いつもなら無意識にやっているクモ殺しを一生に一回だけ控えたに過ぎません。

日本の伝統で仏様は祈願されれば片っ端から要望に応えます。ここで芥川はこの伝統を継承しているのです。それどころか、祈願を受けずとも一方的に救済を始めるのですから、この無制限の寛大さを芥川のお釈迦様はむしろ増幅していると言えます。

ところが、それほどまでに救出に熱心なお釈迦様も、カンダタが再び地獄へ落ちる場面になると、唐突に冷静な観察者に一変します。そして、自分が救出しようとしている者が救出

を打ち切られたのに、予想外の事態進展に何の関与もできない無力者です。これは直前で芥川が描くお釈迦様像と矛盾します。お釈迦様の「無慈悲」に対する不満が絶えない理由はここにあります。融通の利かないお釈迦様に日本人は強い不満を覚えるのです。

無条件で人助けをしないお釈迦様が日本人の気に入らないのは、それが日本独自の文化伝統に相容れないからです。作者の芥川にしても、その文化伝統に則って救出開始場面を描いていますし、その後もこの立場の変更を口にすることはありません。「お釈迦様の別の面」に言及することはないのです。

しかしながら、実際には途中で態度を一変します。一貫して日本の文化伝統を尊重しているわけではないのです。それどころか、カンダタ再落下の場面になると、読者に一言のことわりもなく、日本の文化伝統と相容れない役割をお釈迦様に演じさせるのです。

言うまでもなく、芥川は作家ですから伝統に縛られる必要はありません。しかしながら、読者の期待に背いてまで伝統に背こうとしているなら、それなりに独創的な主張があるはずですが。しかしながら、この作品のどこを見ても、そのような気配は感じられません。それに、少し前の記述では伝統に忠実であるどころか、これを増幅しているくらいですから、伝統に反逆するつもりなどあるわけがないのです。芥川の宜しくないのは、伝統に忠実でないことではなく、日本文化に無関心なことであり、そのことを自覚していないことです。

芥川は日本人である読者の反応を予想するゆとりもなく、しかも自分自身が作った話の文脈を無視して、この話の中核部分で日本の文化伝統に相容れないお釈迦様を描きました。このユニークなお釈迦様は、自分の企画したプロジェクトが実行の途中で破綻しても、自分の非力を恥じることはありません。それどころか、この成り行きに深い理解を示し、すっかり納得しているのです。（「その心相當な罰を受けて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釋迦様の御目から見ると、浅ましく思召されたのでございませう。」）

A場面で芥川が描くお釈迦様は、いったん決まった報いを気分次第で変更する権限があるのですから、行いにふさわしい報いを受けるプロセスに自由自在に介入できる超越者です。ところが、B場面で芥川が描くお釈迦様は、冷静で無力な観察者でありますから、「行いにふさわしい報いを受けるプロセスに、お釈迦様は介入する立場にない」という逆の原則が前提になっています。そして、朝から昼近くまでのわずか数時間で原則が逆転しているのです。しかも、これだけのことを作者は無自覚でやっているのですから、これはもう救いようがありません。

唐突に変身したお釈迦様は、日本人の抱く伝統的な仏陀観とは相容れません。芥川の荒っぽい語り振りから見まして、それと意識して反伝統的な原則をここに持ち込んだのではないでしょう。それと意識して状況を把握していたのなら、日本の伝統的な仏陀観との不整合を気にしたはずですが。日本で伝えられてきた仏陀観の伝承について、芥川には体系的な知識がなかったし、関心もありませんでした。

さらには、知識や教養以前の問題があります。A場面に続いてB場面を描いた時、芥川は

自分が何をしているのか分かっていませんでした。お釈迦様の役割がここで急変したことに気づいていません。矛盾する二つの要素を並べているという自覚がないのです。物語作家に不可欠な構成力が芥川には欠けています。

日本の文化伝統に漠然と乗っかってお釈迦様を描いた直後に、日本の伝統と相容れない異質のお釈迦様を持ち込んだわけですが、作者本人にはその自覚が全くありませんので、調整の必要を感じることもささなく、まして調整が不可能であることなど理解できるはずもありませんでした。

『蜘蛛の糸』の作者は、日本の文化伝承についてはぼんやりとしか知らないまま、肝心のお釈迦様像を途中で無意識に逆転して、作品の中核部分となるAからBへ続く場面連続を組み立てたのですから、二つの異質要素が無造作に並べられ、脈絡のつかない物語が出来上がりました。

D

カンダタが前世で行った「善い事」

残忍な前世の生活の報いとしてカンダタは地獄の苦しみに喘いでいるわけですが、お釈迦様はそれを打ち切ろうとします。この点につきまして、語り手の芥川は理由付けをしまして、生前に一度だけ地面を這うクモを殺さなかった事実を挙げています。何か善行を行ったというのではなく、悪いことをしなかったに過ぎません。

悪いことをしなかったといっても、人殺しをしなかったのではなく、クモを殺さなかったに過ぎません。ところが作者の芥川は、「踏み殺すのを控えたこと」を「善い事」として、しかもその報いとして「地獄の苦しみが消えること」さらには「極楽へ行くこと」を考えているのです。

[カンダタは前世で]いろいろ悪事を働いた大泥棒でございますが、それでもたつた一つ、善い事を致した覚えがございます。と申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を舉げて、踏み殺さうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違ひない。その命を無闇にとると云う事は、いくら何でも可哀さうだ。」と、かう急に思ひ返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます。

「人間もクモも命の価値は同じである」という判断を肯定する文化が広く読者たちに受け入れられていない限り、このような話を読まされた読者は戸惑うばかりです。言うまでもなく、作者の芥川は人間の命とクモの命が同価値であると言っているわけではなく、万事につきぼんやりしていて、細かいことには無頓着なだけです。

それに、仮に人間とクモの命が同価値であるとしても、クモを殺さなかったのは生涯で一度きりであるのに、人間を殺したのは数えきれません。さらに、クモを殺さなかったといっ

でも、不運にも何かの理由で窮地に陥った哀れなクモを必死の努力で助けたわけではなく、踏みつけようとしていたのを思い止どまっただけです。こんなことを「善い事」と認定して、巨大悪を埋め合わせるに充分と判断するのですから、芥川の考えることは徒事ではありません。芥川は考えなしに話を進めて、無理に無理を重ねています。しかも本人はそのことを自覚することさえないのです。

これしきのことが口実になって、お釈迦様の意志で地獄の苦しみが途中で打ち切られて極楽行きが決まるのです。一回だけ小動物を殺さなかったという理由で、死ぬまで人殺しを繰り返し続けた究極の悪党を地獄から極楽へ移すというのです。

芥川によれば、普段なら踏み潰すクモを踏み潰さなかったことは「善い事」であり、その根拠となるべきカンダタの思いは「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違ひない。その命を無闇にとると云う事は、いくら何でも可哀さうだ」と言葉で表現されます。カンダタがこういう思いをしたのは、その全生涯で一回きりです。そして、限りない哀れみをクモに注いだ残虐無比な男は、その後も生き方考え方を少しも変えていません。

「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違ひない。その命を無闇にとると云う事は、いくら何でも可哀さうだ。」

並の人間が一生に一度くらい気まぐれにこういう思いをしても構わないでしょう。ところが、カンダタは並の人間ではありません。殺人と放火を習わしとする凶悪な強盗なのです。こういう前世があったからこそ、今は地獄でこの上ない苦痛を受けているのです。

この犍陀多という男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございます……

……ですからさすがの大泥坊の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかかった蛙のやうに、唯もがいてばかり居りました。

そういう者が極楽へ行くには、クモを殺さなかったことをきっかけに、少なくとも以前よりちっとは優しい人間になる必要があります。しかしながら、この作品で作者が描くカンダタは、残忍この上ない生き方をいささかも変えることはありませんでした。クモ一匹を殺すのが「いくら何でも可哀さうだ」と思った後も、死ぬまで強盗稼業をやめていないのです。

強盗を職業とする以上は人殺しを止めることができないにしても、せめて時々それを悔いるならともかく、「善い事」の後もカンダタの心掛けが変わるわけではなく、「その命を無闇にとると云う事は、いくら何でも可哀さうだ」という思いとは縁遠い生活が続きます。作品全体の中で、この言葉は浮き上がっているのです。

殺すのを控えたことがあるにしても、そのお陰で助かったのはたかがクモ一匹に過ぎませんし、「たつた一つ、善い事を致した」と作者が念を押していますように、たった一回切りです。そして、この場面の心理描写が不可欠な根拠となって、『蜘蛛の糸』のストーリーが展開するのです。こうして、クモ一匹を一度だけ殺さなかったというだけの理由だけで、強

盗殺人を生業とする人間が地獄の苦しみにから逃れる資格を得ます。

作者の芥川はこの「善い事」を口実にし、作品全体から浮き上がった言葉でそれを理由付けをして、地獄で受ける苦しみにから悪党を救い出そうとするお釈迦様の行動を正当化しているのです。そして、他の部分と繋がらない言葉を提示するだけで、放火と殺人の生涯を埋め合わせて余りあると思っているのです。読者を騙すつもりがないとすれば、自分自身の言葉が目眩ましとなって、ここで作者は外のことが全く目に入らず、残忍なカンダタの人物像を一時的に意識の外へ押しやらざるを得なくなりました。こうして、不用意な作者が作り出した作品は、わずか数頁の短編であるにもかかわらず、全体の構成に致命的な破綻を来すことになったのです。

E

因と果の不均衡/因果セット間の不均衡

芥川龍之介の『蜘蛛の糸』で、カンダタは強盗を生業として、死ぬまで殺人と放火を繰り返して一生を送りました。そして、それを後悔したことなど一度もありません。この作品では、カンダタが極悪非道の極みとして紹介されているのです。

その報いとして、カンダタは「地獄の底の血の池」で「地獄の責め苦」を受けていたのです。この男を地獄から救出しようとするのですから、恐るべき報いが途中で打ち切られることとなります。しかも、蜘蛛の糸の片端を握っているのは極楽にいるお釈迦さまです。この極悪非道のカンダタの行き先は何と極楽なのです。

一方では死ぬまで放火殺人を繰り返したせいで地獄の苦しみを味わい、他方では一度だけクモ殺しを控えただけで地獄からの解放されて極楽へ行かせてもらえるのです。このように、因果セット β で因と果の対応 (〈因〉一度だけクモ殺害中止:〈果〉地獄の痛み中止/極楽行き) に均衡がとれていないだけでなく、因果セット α (〈因〉生涯にわたる放火殺人→果地獄行き) と因果セット β (〈因〉一度だけクモ殺害中止→〈果〉地獄の痛み中止/極楽行き) の間で均衡がとれていないのです。

α

β

因: 生涯にわたる放火殺人 一度だけクモ殺害中止

果: 地獄行き

地獄の痛み中止/極楽行き

そして一方では、窮地に追い込まれたカンダタが何とか助かろうとして、外になすすべがないまま一言を叫ぶと、直ちに地獄へ逆戻りとなります。その理由として芥川が挙げているのは「無慈悲」です。そして、「自分だけが助かろうとするカンダタの無慈悲な心が罰を受けたのだ」という主旨の言葉で、この「無慈悲」について説明を加えています。

そうしますと、一方では一回だけ小動物を殺さなかったという理由で、極楽へ移動すべく極悪非道の者が地獄から救出され、他方では他人への優しさを欠くという理由で地獄行きの罰が科せられます。このように、二つの因果セット (β と γ) の中でそれぞれ因と果の対応

に均衡がとれていないだけでなく、因果セット β と因果セット γ の間で均衡がとれていないのです。

β	γ
因: 一度だけクモ殺害中止	身勝手さ
果: 地獄の苦しみ中止/極楽行き	再び地獄行き

因果関係 β では、一度だけクモを殺さなかったことを因として、地獄の苦しみの中止を果としています。一度だけクモを殺さなかったのをきっかけに、以後は全くクモ殺さなくなったというわけでもありませんし、まして人間殺しを控えるようになったわけではありません。それどころか、今まで通り強盗稼業を続け、放火と人殺しに励みんで一生を全うします。

こんな奴には当然の報いである地獄の苦しみを打ち切らせるというのですから、日本の伝統文化から見て、これはもう混乱と言うしかありません。しかもカンダタに与えられたクモの糸は、一方の端を極楽のお釈迦様が手にしていますから、そのまま進めば極楽行きです。

カンダタ自身も、状況を全く把握していないくせに、厚かましくも楽天的に、最もうまく行く場合の可能性として、極楽行きを考えているのです。妄想であると言えばそれまでですが、カンダタの内心をそのように描写するところによって、この救出活動の大きな成果を前宣伝できるし、お釈迦様の並外れた能力について読者に強く印象づけることができます。

犍陀多はこれを見ると、思はず手を打つて喜びました。この糸に縋りついて、どこまでも登つて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございませぬ。いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえ出来ませう。さうすれば、もう針の山へ追ひ上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はございませぬ。

このように、因果セット β では因（一度だけクモ殺害中止）と果（地獄の苦しみ中止/極楽行き）の間で均衡がとれていませんし、因果セット γ でも因（身勝手さ）と果（再び地獄行き）の間で均衡がとれていません。荒っぽい手法から見て、この二つの因果セットは芥川の発明です。

『蜘蛛の糸』で設定された三つの因果セット α β γ の中で、因と果が均衡がとれているのは、 α （生涯にわたる放火殺人 → 地獄行き）だけです。因果セット β と因果セット γ が目立つ荒っぽさがここには見られず、因果セット α は構造が実にまともです。

地獄で苦しむカンダタを登場させるために、まともな因果（ α ）を設定しました。次に、そのカンダタを救い出す場面を作るために、まともでない因果（ β ）を設定しました（一度だけクモ殺害中止 → 地獄の苦しみ中止/極楽行き）。そして、そのカンダタが再び地獄へ落ちる場面を作るために、はなはだまともでない因果（ γ ）を設定しました（身勝手さ → 再び地獄行き）。

さらにこれに加えて、因果セット α （生涯にわたる放火殺人 → 地獄行き）と因果セット β （一度だけクモ殺害中止 → 地獄の苦しみ中止/極楽行き）の間には大きな不均衡があります。そして、因果セット β （一度だけクモ殺害中止 → 地獄の苦しみ中止/極楽行き）と

因果セットγ（身勝手さ → 再び地獄行き）の間にも大きな不均衡があります。

これが物語を展開させるために芥川がやったことのすべてです。これだけ食い違いに満ち満ちているのですから、『蜘蛛の糸』で全体の構成が不備に終わるのは当然です。これを作った芥川龍之介は、構成力が豊かな物語作家とは言えません。

F

驚き恐れるカンダタ

カンダタがよじ登っていたのは、非常に細いクモの糸です。これに縋って登攀するカンダタがふと下を見ますと、「数限りも無い罪人たち」が自分の後をつけて懸命に登って来ます。この時にカンダタが感じたのは驚愕と恐怖でありました。

犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、暫くは唯、莫迦のやうに大きな口を開いた儘、目ばかり動かして居りました。自分一人でさへ断れさうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪へる事が出来ませう。

クモの糸の強度は一人を支えられるかどうかも確かでなく、登って来る者の数は限りなく増えていきます。そしてカンダタの判断するところでは、このまま事態を放置すれば、そのうちに蜘蛛の糸が切れるのは確実です。すぐに何とかしなければならぬのです。

もっとも、これは普通の蜘蛛の糸ではなく、超自然力が備わった蜘蛛の糸かも知れません。普通の蜘蛛の糸なら、せいぜいクモ一匹と捕まったトンボを支えるのがやっとなのですが、すでに「数限もない罪人たち」を支えているのですから、並のクモの糸ではありません。何しろ、この蜘蛛の糸を地獄へ下ろしたのはお釈迦様なのです。しかしながら、そうであるとしても、カンダタはそのことを全く知らされていないのです。

トンボ一匹どころか、人間一人がぶら下がっても大丈夫なのですから、これが並のクモの糸ではないことに気付いてもよさそうなものですが、何しろカンダタは地獄脱出が成るか成らぬかの瀬戸際にありますから、そんなに冷静に周囲の状況を観察する余裕などありません。このカンダタにとりましては、地獄から逃れることさえできれば手立ては何でもよいわけですから、目の前に天から垂れて来るものを見て、その正体が何であろうと、とにかくそれに縋りついたに過ぎません。

銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるやうに、一すじ細く光りながら、するすると自分の上に垂れて参るではございませんか。犍陀多はこれを見ると、思はず手を打って喜びました。……

かう思ひましたから犍陀多は、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥棒の事でございますから、かう云ふ事には昔から、慣れ切ってるるのでございます。

このように、とにかく縋り付いて登れるものを目にして、カンダタは信じられないほどの幸運に頭が一杯になっています。地獄から逃げることしか考えないカンダタには、その正体

を見極める余裕などないのです。「自分一人を支えることができるどころか、無限の重さに堪ええる魔法のロープである」と判断できる根拠がないまま、「何百何千の人間を支えることができない」と考えるのは当然でありましょう。

もし萬一途中で断れたと致しましたら、折角ここへまでのぼつて来たこの肝心な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまはなければなりません。そんな事があつたら、大變でございます。が、さう云う中にも、罪人たちは何百何千となく、まつ暗な血の池の底から、うようよ這ひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼつて参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまふのに違ひありません。

このような場合にカンダタの念頭にある選択肢は、「自分だけ助かって他人は滅びる」か「自分も他人も滅びる」かしかなかった。「自分も他人も助かる」という選択肢も「自分が滅んで他の人々は助かる」という選択肢もありえないのです。

「数限りも無い罪人たち」のせいで、しがみついている細いクモの糸は、今にも切れそうになっています。このことに気づいた瞬間にカンダタの覚えたのは、ただただ恐怖と驚愕でありました。カンダタは窮地に追い込まれているのです。将来を見据えて自分の損得を計算するゆとりなどないのです。この瞬間にカンダタが抱えているのは緊急危機管理の問題なのです。

他人に気を配る優しさがあるかどうかを試されているのは、このように窮地に追い込まれて恐れ脅えている者です。ここで設定されているのは、優しさを発揮するのに最もふさわしくない境遇です。これを構想して描いた場面を通じて言いたいことが何であれ、ここでも芥川が設定した状況は均衡を欠き、素直な読者を納得させるには無理があります。

G

因としての「身勝手さ」/「無慈悲」

自分だけ助かろうとしたカンダタの心は「無慈悲」とされ、それによって受けた「罰」が地獄への再落下であるとされます。御釈迦様の期待通りにことが進めば、「慈悲」を備えた人なら自分だけが助かろうとはせず、「何百何千」の「罪人たち」も助けようとするはずで、お釈迦様の勝手な思い込みの中で、究極の悪人であるカンダタの場合も同じようにことが進むはずで、思い込み通りにならなかったのが面白くなく、お釈迦様は自分のことは棚に上げて、すべてをカンダタのせいにしてしまいます。

自分ばかり地獄からぬけ出さうとする、犍陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでございませう。

カンダタはクモ殺しを控えるという「善い事」を一回だけしました。だからこそ、「地獄で蠢いている」数知れない「罪人」の中から一人だけ選ばれて、極楽へ移される資格を得た

のです。芥川のお釈迦様は、「何百何千」の「罪人たち」の中からカンダタを選び出して、地獄で苦しませるのは不当という判断をしました。その論拠は一回だけクモ殺しを控えたことです。

何しろクモ殺しを一度だけ控えるなどの「善い事」をしていないのですから、この「罪人たち」は悪のカンダタさえ敵わない一ランク上の悪でありまして、最も「慈悲」をかけるに値しない奴らです。ところが、御釈迦様の判断によりますと、そんな奴らを助けようとしなかったカンダタは「無慈悲」あり、その罪は地獄行きに値します。

もっとも、「どんな悪党にも慈悲をかけるべきだ」という立場がありえないわけではないかも知れません。しかしながら、そういう立場に立ちますと、「無慈悲」なカンダタにも「慈悲」をかけなければならなくなりますので、「心相當な罰をうけ」ることはありえず、地獄再落下の場面は成り立たなくなります。

しかしながら、お釈迦様の期待通りにことが進展するには、「どんな悪党にも慈悲をかけるべきだ」という立場を取らざるをえません。カンダタが「無慈悲」でなければクモの糸は切れず、「数限りもない罪人たち」は「後をつけて、蟻の行列のやうにやはり上へ上へ一心によちのぼって」行きます。そして、クモ殺しを一度も控えなかった「罪人たち」、人殺して一生を全うしたカンダタを遥かに越える超極悪人もすべて救い出されることになりますから、地獄はからっぽになります。

「御釈迦様の御目から見ると、」こういう次第で再び地獄へ落ちたことは、「浅ましく」思えます。しかしながら、ここで御釈迦様が考えていることは筋が通りません。「無慈悲」という言葉を使って芥川が進める物語展開は失敗に終わりました。一回だけクモ殺しを控えたことを地獄脱出の口実とする話の中で、クモ殺しを控えたことなど一回もなかったらしい大勢の悪党どもを思い遣らなかつたからといって、「無慈悲」を口実にカンダタを再び地獄に落とすわけにはいきません。「無慈悲」は地獄落ち判決の論拠とはなりえないのです。それに、「これは俺のだ」と叫んだことを今さら咎められてもカンダタは困ります。このクモの糸は最初からカンダタだけに提供されたものなのです。

そして、この話の中で取り上げられた三つの因果関係 ($\alpha \beta \gamma$) のうち、この因果関係 (γ) だけが他の二つ ($\alpha \beta$) と異質です。芥川自身が構想した因果システムからも、これだけが浮き上がっているのです。 α の因 (生涯にわたる放火殺人) は行為であり (正確には行為の集積)、 β の因 (一度だけクモ殺害中止) は行為を止めたことです。 β の因は少し問題がありますが、とにかく行為にかかわることです。ところが、 γ の因とされているもの (身勝手さ/無慈悲) は心に属する性質であり、行為ではありません。行いでないものが因とされているのです。

カンダタは実際にナイフを抜いて蜘蛛の糸を切ったわけではなく、「下りろ。下りろ」と大声で喚いただけです。それに、これくらいでクモの糸から離れるような相手ではありません。いずれにしても、他の2例 ($\alpha \beta$) では因としての行いが挙げられているのに、ここ

(γ) だけ因としての行いが挙げられていないのです。

さらに、読者の理解を得る上で、もう一つ別の問題があります。現代社会の常識に照らせば、カンダタが喚いたことは緊急避難の行為であり、極刑に値するものではありません。「自分だけ助かって他人は滅びる」と「自分も他人も滅びる」という二つの選択肢のうち、前者を選ぶことは許容されているのです。そして、芥川がこの物語を書いたのは現代人に読ませるためです。過去の文化や異文化を織り込んだ物語を作ろうとするなら、現代人を納得させる工夫をしなければなりません。しかしながら、この点について芥川は言いたいことがあるわけでもなく、現代という限られた時代を越えた問題を取り上げようとしているわけでもありません。ここで芥川が設定する物語展開は無駄に現代の常識に逆らっています。

言うまでもなく、作者は社会の常識に盲従する必要はありません。「どんな逆境にあろうとも、他人への思い遣りを貫く」という非常識な立場はありえますし、それを実践する人は現代にもいます。しかしながら、そういう人は非常に稀であり、コルベ神父のような異常者です。確かに芥川も異常者を登場させてはいますが、異常の方向がちょうど逆です。出てくるのが悪の異常である以上、「自分が滅んで他の人々は助かる」という選択肢はやはり不可能です。

いずれにしましても、カンダタが外の連中を追っ払おうとする場面は、確かに自分のことしか考えない身勝手な例ではありますが、異常事態の中で異常人物が登場するのでは、並の人間を説得して「無慈悲」を戒めるのに効果的ではありません。

ここで芥川が地獄落ちに値する「罪」としている「無慈悲」とは、他人への思いやりです。しかも、自分が絶体絶命の窮地に立つ時に発揮すべき究極の思いやりです。ところが、ここでカンダタはもともと身勝手の極みとも言うべき男である上に、ひたすら脅え恐れています。究極の思い遣りに最も程遠い人物が登場しているのです。しかも、その人物は究極の窮地にあります。読者にとりましては、この点でも極めて納得し難い状況が設けられています。

お釈迦様がカンダタを地獄から救出しようとした口実は、前世でクモの殺害を控えたことに過ぎませんでした。同じカンダタが再び地獄へ落ちなければならなかった口実は、今生での心掛けが直しくなかったことです。救出の条件としてカンダタに要求されていたは「慈悲の心」であり、他人への思い遣りでありました。しかも、クモの殺害を控える程度の低水準の「慈悲の心」/思い遣りではなく、自分自身の救出可能性を犠牲にしてまで実現しようとする究極水準の「慈悲の心」/思い遣りでありました。前世で放火と殺人で人生を送った者に対して、しかも地獄で究極の苦痛を嘗めても悔悟することがない者に対して、このような究極の「慈悲の心」/思い遣りが唐突に要求されたのです。

カンダタを地獄から救い出すと決めた際にお釈迦様が立てた構想は、「一回だけクモ殺しを控えたことを評価して、数知れない悪事を帳消しにする」というものでした。ところが今頃になって、喚いただけですべてが終わりです。これでは話が違います。芥川のお釈迦様には、一貫した救済方針が欠けているのです。

カンダタが地獄へ落ちる場面は、この話の中で最大の見せ場です。それを支える理由付けが、この程度の浅知恵でなされているのです。作品の核を成す所でも、整合性を気につけない基本姿勢は変わりません。むしろ、これが最後とばかりに不整合の極みに迫った感があります。これでは作品全体が破綻するのは避けようがありません。

芥川の組み立てた物語の筋書きは、慎重に考え抜かれたものではありません。自分で考えたのかどこからか借りたのか、部分部分で別個にアイデアを思いつくことはあっても、それを無秩序に並べるだけで、一つ一つ吟味をした上で全体を統合して筋の通った話にまとめることができないのです。

H

人間の身勝手さを扱う作品にふさわしくない登場人物

芥川のテキストを見ますと、「自分だけが助かろうとするカンダタの無慈悲な心が罰を受けたのだ」という主旨の言葉があります。芥川が考え出した筋立てを追うと、慈悲の心を欠くことは、最も恐ろしい罰に相当する重罪であり、地獄の苦しみを味わうのがふさわしいということになります。

自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相応な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、浅ましく思召されたのでございませう。

語り手である芥川の説明によりますと、カンダタが地獄へ落ちる罰を受けたのは、自分のことしか考えない「無慈悲な心」のせいです。身勝手さが罰を受けたというのです。もし身勝手さを戒めることが作品の主旨であるとすれば、作者は適切な主人公を登場させているでしょうか。

作者が構想したスキームでは、極めて高い倫理基準が示されます。ところが、それを難無く切り抜けると期待されているのは、決して高い水準の人格者ではありません。それどころか、極めて反社会的な人間です。お釈迦様がそういう男に期待したのは、極めて社会性の高い基準に達することであり、究極の倫理基準で行動することでありました。

『蜘蛛の糸』に登場するお釈迦様は、そういう見当外れな期待をしておいて、思い通りに行かなかったからといって、「悲しさうな御顔」をするのです。そして、カンダタの「無慈悲な心」を「浅ましく思召」るのです。このお釈迦様が「無慈悲」であるかどうかはともかく、少なくとも人間性の観察に優れた人とは言えません。

カンダタは大物の強盗でありまして、殺人と放火を繰り返して一生を終えました。人間の中でも最悪グループに属します。一生に一度だけクモを殺さなかったことがありますが、その後もクモや人間を殺し続け、それを反省したり改悛の情を示したことはただの一度もありません。

こんな極悪非道の極みとも言うべき男を登場させて、外の人々にも気を配ることを期待す

るとすれば、これはお門違いもいいところです。この男は一度だけクモを殺すのを控えたことがありましたが、それをきっかけに「慈悲」の心が備わったわけではなく、残忍な行いの数々を悔やんだことさえありませんでした。そして、この方面で教育を受ける機会もありませんでした。地獄からの救出を交換条件に真人間になる取引があったわけでもないのです。

カンダタは強盗を生業としてきたわけですから、人殺しを反省してくれるだけでも期待のし過ぎなのに、そんな人間に「慈悲」を期待するとすれば、そのように人間性に対する洞察に欠ける話には何の説得力はありません。しかも、この男が絶体絶命の窮地にある場合ならなおさらです。そのような作品を読んで、人殺しの習慣がない並の読者が我が身を振り返り、身を正す気になるでしょうか。あるいは、人間の真実を抉る話と評価して、作者の深い洞察に感動するでしょうか。

カンダタは「慈悲の心」が欠ける悪党であるだけでなく、窮地に追い込まれた悪党です。そのような立場にある者が他人に気を使うことも、決して容易ではありません。追い詰められた悪党のカンダタは、他人への優しさを期待しにくい条件を二つとも満たしているのです。芥川のお釈迦様が優しさを期待したのは、そのように優しさを最も期待できない男でありました。

人間の身勝手さを主題とする作品に登場させるべき人物は、せめて並の人でなければなりません。そして、もっと望ましいのは高い人格の人です。読者に訴えることができるのは、並の人間が見せるありきたりの身勝手さよりも、立派な人が思わぬ時に見せる身勝手さでありましょう。人間に抜き難い身勝手を取り上げるには、非の打ちどころのないと見なされる人物を登場させるのが一番よいのです。

芥川によりますと、蜘蛛の糸が切れたのは「自分ばかり地獄からぬけ出さうとする、犍陀多の無慈悲な心」のせいです。しかも、カンダタが置かれていた状況から考えて、これは並の慈悲ではありません。聖人にも実践することが容易でない究極の慈悲です。究極の窮地に立つ究極の悪党に期待されているのは、何と究極の慈悲の実践なのです！ そして、それが実践できなかったので、究極の惨めな報いが課せられるのです。

この作品のテーマが人間に普遍的な身勝手であるなら、それを提示するのに作者は最も拙劣な方法をとっていることになります。この点でも作者の芥川は話の筋を通すことに熱心でなく、主要登場者の人物像を構想する際にはなほだ思慮に欠けています。

教材研究:『蜘蛛の糸』に見られる構成の破綻

平成14年度と15年度に新入生向けの科目「基礎演習」を担当し、芥川の『蜘蛛の糸』を教材の一つとして用いました。その間に続けてきた教材研究の成果がこの報告です。問題の多い作品にはそれなりに教育効果を工夫する余地がありますが、来年は逆に完成度の高い作品を選ぶつもりです。